

## 研究ノート

# 繁栄期アントウェルペンの経済的基礎

—ファン・デル・ウェーの寄与—

中 沢 勝 三

### I

1963年に刊行されたファン・デル・ウェーの大著『アントワープ市場の成長とヨーロッパ経済<sup>(1)</sup>』は、アントウェルペン国際市場史の研究にとってはもとより<sup>(2)</sup>、同市場を軸とした15・16世紀のヨーロッパ経済史の研究にとっても劃期的な労作であった。著者は、従来の研究を網羅的に使用し、さらに33に及ぶアルヒーフ古文書館渉猟の成果を折り込んで、方法的には価格・労賃史の成果を駆使しつつ<sup>(3)</sup>、3世紀にわたる同市場の消長を、ネーデルラントと広くヨーロッパ双方の政治・経済との係わりの中で浮き彫りにしたのだ。この研究はファン・ハウテの学説<sup>(4)</sup>に深く影響されているものであるとはいえ、著者はファン・ハウテの説を乗り越え、本書において、繁栄期アントウェルペンの経済的基礎に対して独自の全体像を切り開いたのである。その上本書が多くの研究成果を摂取した初めての通史であったということから<sup>(5)</sup>、本書がヨーロッパ内外の学界に及ぼした反響は甚だ大きかった<sup>(6)</sup>。そこで本稿では、本書が提起した数多くの問題の中から、アントウェルペンの繁栄を招来した国際的な経済的背景が如何なるものであったのか<sup>(7)</sup>、という一点に絞って内容の紹介をしてその成果を問ひ、今後の筆者の研究の指針を探ってみたい。

(1) H. Van der Wee, *The Growth of the Antwerp Market and the European Economy*, I-III, The Hague, 1963.

(2) 15世紀末の興隆期について、拙稿「国際商都アントウェルペンの興隆」『一橋論叢』75巻2号、1976年参照。

(3) この方法についてはジャンンなどの批判があるが、筆者には目下の所評価を下すことができない。但し、本稿の観点に立つ限りではこの点の検討を抜きにしても差し支えはない。

- (4) この研究史上に占める意義については前掲拙稿参照。
- (5) H. Van Werveke, *Bruges et Anvers, Huit siècles de commerce flamand*. Bruxelles 1944 や E. Sabbe, *Anvers, métropole de l'Occident(1429—1566)*. Bruxelles, 1952. のような小冊子の通史は存在していた。
- (6) 中でも本書に対する次の2つの長文の書評が注目に値する。W. Brulez, 'Antwerpens bloeitijd,' *Bijdragen voor de Geschiedenis der Nederlanden*, 19 (1964), blz. 151-161. ; P. Jeannin, 'Sur une histoire du marché anversoise dans son cadre européen,' *Annales, Economies, Sociétés, Civilisations*, 20 (1965), p.1222—1241. 他に E. Schremmer, 'Antwerpen als Warenhandelsplatz im 15. and 16. Jahrhundert und seine wirtschaftliche Beziehungen zu Mitteleuropa,' *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 178 (1965), SS. 270-284. も本書を扱っている。この研究ノートは同じ頃踵を接して現われた研究と史料集の主だったものを取り上げたもので、研究の見通しを得るのに格好のものである。なお、H. Lapeyre, 'Anvers au XVI siècle d'après des travaux récents,' *Revue d'Histoire moderne et contemporaine*, 11 (1964), pp.191—202. があるが、時期的に間に合わなかったためか本書を取り上げていない。
- (7) こういう問い方自体、既に国際的な政治・経済の動向が繁栄の契機であったという立場を前提しているものである。この点で筆者も同じ立場にある。著者の最近の論文もこの立場を確認している。'Structural changes and specialization in the industry of the Southern Netherlands, 1100—1600' *Economic History Review*, 2nd Ser., 28 (1975), p.216. なお、表題の「経済的基礎」という表現は、この観点で把えたような内容を指して用いている。

## II

本書の扱かう時期は14世紀中葉から30年戦争の勃発までの約2世紀半である。本書は3巻で構成されており、I巻が価格史料を中心とした統計史料とその解題で562頁、II巻が叙述で436頁、III巻が主要な史料の図表と索引で168頁である。各巻が分冊になっているため参照に極めて便利である。

叙述に充てられたII巻は、年代順になされた叙述と分析に重点をおいた第1部282頁と、部門別の分析と構造変化に主眼をおいた第2部150頁から成っている。本稿の観点からすると、このうち第1部第5章「西欧の首府アントワープの出現(1493年—1520年)」と第6章「決定的な時代(1521年—1550年)」が主として問題になる。特に第6章は、II巻の2部全14章構成のうち唯一つA・B

の2つの節に二分された章であり、頁数も最高で本書の中心部を成しているといつてよい。A節は「20年代と30年代初頭の危機とそれがネーデルラント経済に与えた致命的な結果」、B節は「アントワープの新たな商業の基礎と低地地方の経済的再生」という表題がついている。

ところで、著者は15世紀90年代を以てアントウェルペンが国際商都（著者の表現では「西欧の首府」）へ興隆した劃期であったと考える。そしてこの興隆は、大方国際商業の動き、特にイギリス毛織物の大陸への伸張とつながりを持った中部ドイツとの内陸交易の振興と不可分に関係しており、その背景にはフィリップス端麗公と次代の摂政マルハレータの英仏に対する中立的な姿勢によつてもたらされた政治的な安定があったといふ<sup>(41)</sup>。この国際商業の中味を、著者は、「マグヌス・インテルクルススによつて保証されたイギリス毛織物取引の自由化が、ポルトガル香料により刺戟され1500年頃にその目的地としてアントワープを選び取っていた南ドイツの拡大を促した（傍点引用者）<sup>(42)</sup>」と述べる。さらに彼はイギリス毛織物、ポルトガル香料、それに南ドイツ銀銅これら三者の取引に対して、「アントワープ商業の拡大の初期の三支柱<sup>(43)</sup>」という規定を与えているのである。まさにファン・ハウテの把え方と瓜二つといつてよいではないか。そしてこの「初期の」という表現ほど彼のファン・ハウテとの距離を微妙に言い当てているものはない。つまり著者は興隆期アントウェルペンに最大の衝撃を与えた契機について、ファン・ハウテと同じ考えを持っているといつてよい。だが同時に、「初期の」という限定詞こそ彼固有の展望を示唆しているものなのだ。すなわち彼は、初期の繁栄の三支柱は後の16世紀中葉迄支柱として存続しなかつたといつているのである。彼は世紀中葉の繁栄の絶頂期におけるアントウェルペン商業の支柱として、スペインとの結びつきの強化、南欧交易の伸張、イギリス毛織物取引のブームを挙げている<sup>(44)</sup>。このようにアントウェルペンの繁栄の経済的基礎が変遷を遂げ、初期と絶頂期において異なるという展望こそ著者が本書において果たそうとした企てに他ならない。

彼独自の主張を少し詳しく辿ってみることにしよう。

1521年以後アントウェルペン商業は二つの相矛盾した動きによって影響を受け、著者はこれを第6章において別々の節で扱っている。6章A節において初期の三支柱が同市場の舞台から引き下がっていくいわばマイナスの側面を扱いかい、B節では新たな支柱が同市場の前面へ飛躍していくプラスの側面を扱っている。時期的には前者が先行し、後者は1530年代中頃に降頭在化していったという。以上のことから容易に察せられるように、1520年代の危機が前代の三支柱と後代の支柱の分水嶺となっているのである。

この危機は、1519年のカルル1世の皇帝登極に始まるハプスブルク家対フランス・ヴァロア王家の対立を軸とした国際政治の危機によって特色づけられる<sup>(6)</sup>。同時に対デンマーク戦争の開始によってバルト海の穀物輸送が麻痺し、ダンツィヒを経由してアントウェルペンにもたらされていたフッガー家のハンガリア銅の海上輸送も打撃を蒙った<sup>(6)</sup>。さらに1525年には南ドイツで農民戦争が勃発した。

こうした危機の中でアントウェルペンの初期の三支柱の土台が掘り崩されていく。アントウェルペンを基地としていたポルトガル香料の西北ヨーロッパに対する独占的地歩は1520年代後半には頂点を過ぎていた<sup>(7)</sup>。同じ時期フッガー家のハンガリア銅はアントウェルペンに向かわなくなり、かつて15世紀においてそうであったように再びヴェネツィアへと販路を求めていくのである<sup>(8)</sup>。この販路の転換を、著者は、ポルトガル香料の不振によるアントウェルペンの吸引力の低下に依るものであったとしている。このポルトガルの後退は、ヴェネツィア経由のレヴァント香料の逆襲のためばかりではなく、ポルトガル人が1530年代に本格化した新大陸からの銀の流入によってセヴィリアでより容易に銀を購入することができるようになったからでもある<sup>(9)</sup>。こうして初期の拡大のきわめて重要な基礎であったポルトガルと南ドイツ二支柱の商業枢軸が崩壊していったのである<sup>(10)</sup>。

その反面1520年代以後同市場に新たな別の商業取引の流れが現われ、その支柱になっていく。第一に、新大陸と結びついているイベリア半島との交易の増

大である。アントウェルペンからはフランドルの毛織物が、スペインからはフランドルの毛織物が、スペインからは羊毛が送られていく。同じ頃スペイン王家は同市の金融業者に大きく依存していった<sup>(11)</sup>。第二に、1529年のカムブレイの講和によってハブスブルク家の優位が確定した後の対イタリア交易の隆盛である。これは1540年のトルコとの和平以降、アントウェルペンを起点としたヨーロッパ大陸南北縦断の商業交易の活発な動きへと展開していく。さらにこの流れはアルプスを越え、ヴェネツィアとアンコーナを南の玄関口としてレヴァントをも巻き込むものであった。これに拍車をかけたのが1542年のイギリスの通貨大改鋳であり、イギリス毛織物、特にカーギー織など軽質の毛織物のアントウェルペンへの流入がブームとなっていくのである<sup>(12)</sup>。

以上が本稿の視角から整理したファン・デル・ウェー説の要旨である。以下IIIにおいていくつかの批評に触れながら若干の検討を加えてみることにする。が、その前に、以上の論旨から看取される重要な一点を確認しておきたい。それはイギリス毛織物取引のアントウェルペン市場に対して持つ意義の大きさについてである。1520年代の危機の時代に一時不振をかこったとはいえ<sup>(13)</sup>、イギリス毛織物は繁栄期アントウェルペンの一貫した取引の大宗であり続けた。このことは、世紀後半の動乱の時代において、イギリス毛織物とネーデルラント市場、就中アントウェルペンとの関係が断たれるに及んで、同市場の屋台骨が揺さぶられると同時に、殆んど唯一の取引のチャンネルを失なったマーチャント・アドヴェンチャラーズがやがて没落への道を進んでいったことから窺われるのである。

(1) H. Van der Wee, *The Growth of the Antwerp Market*, II, p. 119.

(2) *ibid.*, p. 123.

(3) *ibid.*, p. 143.

(4) *ibid.*, p. 177.

(5) *ibid.*, p. 144.

(6) このルートについては、ライン河添いの内陸西行路を経たとも考えられるのであるが、著者の挙げていない次の重要な研究においても、ダンツィヒを経由した

海上ルートを取ったと明言されている。L. Schick, *Jacob Fugger. Un grand homme d'affaires au début du XVI<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1957, p. 281.

- (7) アントウェルペン以北についてはなおしばらく独占的な地歩を維持する。Van der Wee, *op. cit.*, II, pp. 154-155.
- (8) *ibid.*, p. 145 and p. 154.
- (9) *ibid.*, p. 159.
- (10) *ibid.*, p. 161.
- (11) *ibid.*, p. 177-178.
- (12) *ibid.*, pp. 184-185. 著者は第三の支柱としてワインを主要品目とするフランスとの取引を挙げているが、さしたる論拠を示していないので、ここでは検討から省いた。
- (13) *ibid.*, p. 145.

### III

繁栄期アントウェルペンに対する著者の展望は、主に第二次大戦後に現われた個別研究の成果に依り、それらを同市場の浮沈に係わらせて企てられたものであった。16世紀初めにヨーロッパで打ち立てられたポルトガル香料の覇権がやがて16世紀の進むにつれて崩壊していったことは夙にレーンが指摘し、今日では通説的な認識になっているとさえいってよい<sup>(41)</sup>。16世紀前期におけるイギリス毛織物とアントウェルペン市場の密着した関係も同様の市民権を獲得しており、これについては今日反論さえみられない<sup>(42)</sup>。そしてこのイギリス毛織物取引がアントウェルペンを必須の経由地とし、その地で仕上げられた後に大陸縦断ルートへ向かっていったことはブリュレが精力的に研究してきた所である<sup>(43)</sup>。さらに、16世紀に入ってネーデルラントとイベリア半島を結ぶ大西洋岸交易が盛んとなったこともブローデルらによってわれわれに知らされてきたことなのである<sup>(44)</sup>。

以上のことからわかるように、著者が16世紀の20年代を分水嶺として前後に区別するアントウェルペンの個々の支柱の交替についていえば、彼の新しい主張は後期におけるドイツ交易の同市場からの後退という一点に尽きる訳である。だからこそ本書に対する三つの主だった書評の何れもがこの点を取り上げ批評しているのだ。ジャンンは、著者は決定的といえる証拠を提出することな

くドイツの販路の消失を論じたと批判した<sup>(5)</sup>。シュレムマーはこの時期のドイツ経済の状態に対して一面的に停滞していたのだと言い切ることはできないという。彼は、アントウェルペン市場に対する当初のその衝撃的な影響力は認めるものの、同市場の低落と高地ドイツ経済の停滞とを結びつけて考えることができる程には両者の間に密接な関係があったとはいえないというのである<sup>(6)</sup>。

そこで、この点についてファン・デル・ウェーの立論に立ち戻ってみよう。ドイツ交易の停滞を論じる彼の根拠は、プラバント陸上通行税徴収高において、対ドイツ向け取引に関係が深いと彼がいう「南の」徴収所のそれが前代と比べて1540年代に減少したという点に求められている<sup>(7)</sup>。彼は、本書のⅠ巻に11の徴収所の徴収高の推移を史料として載せているが、私はこの数字に検討を加えてみた結果、これが彼の行なったような立論の根拠となるには甚だ不十分なものであると考えざるをえなかった<sup>(8)</sup>。そればかりではない。彼の論旨を忠実に辿る限り、まさにブリュレが指摘しているように、「低落」を示す筈のドイツ向け取引は、実は同時期において活況を呈していたイタリア向けの取引を含んでいるのであって、著者は同一の数字を以て相反する二つの動きを説明せねばならなくなるという矛盾に陥ることになるのだ。ブリュレは、著者とは全く逆にその書評の中で、「ドイツ及びイタリアとの陸路の取引は、この世紀を通じてアントウェルペンの主要な基礎であり続けた<sup>(9)</sup>」と明言しているのである。この点、著者らの提示した材料によってはもとより、そもそもアントウェルペン商業の全体を知らせてくれる統計的史料が存在していないのであるから筆者としては適切な評価を下すてだては目下の所ない。両説の対立を前にして私がいえることは、この議論を前進させるにはさらにきめ細かく輸送ルートと最終目的地の関係を追究していく他はあるまいということだけである。

(1) 栗原福也「16世紀後半の地中海とネーデルラント」『一橋論叢』72巻, 1974年, 19頁以下。

(2) この点については、ファン・ハウテらの通説に大きな疑問を提起したブリュレでさえ積極的な肯定の立場にある。W. Brulez, 'Les routes commerciales d'Angleterre en Italic au XVI<sup>e</sup> siècle', *Studi in onore di A. Fanfani*,

- IV, Milan 1962, p.126. 通説への疑問については ‘Brugge en Antwerpen in de 15de en 16de eeuw : een tegenstelling?’ *Tijdschrift voor Geschiedenis*, 83 (1970). 英訳 ‘Bruges and Antwerp in the 15th and 16th centuries : an Antithesis?’ *Acta Historiae Neerlandica*, The Hague, VI, 1973. 参照。
- (3) 注(2)の文献に加えて, ‘L’exportation des Pays-Bas vers l’Italie par voie de terre au milieu du XVI<sup>e</sup> siècle’, *Annales, Economies, Sociétés, Civilisations*, 14 (1959); ‘Le commerce international des Pays-Bas au XVI<sup>e</sup> siècle : essai d’appréciation quantitative,’ *Revue belge de Philologie et d’Histoire*, 46 (1968).
- (4) F. Braudel, *La méditerranée et le monde méditerranéen à l’époque de Philippe II*, Paris, 1949, 2.éd. revue et augmentée, 1966, tome 1, pp. 128, 208, 549-559 etc. 但しここでは第二版に依っている。V. Vazquez de Prada, *Lettres marchandes d’Anvers*, Paris I-introduction, 1960, pp. 35ff.
- (5) P. Jeannin, *op. cit.*, p.1229.
- (6) E. Schremmer, *a. a. O.*, SS. 281-282. 但しこのような断言の背後にファン・デル・ウェーの利用できなかった次の史料があることを忘れてはなるまい。R. Doehaerd éd., *Etudes anversoises. Document sur le commerce international à Anvers 1488-1514*, Paris, 1963. 注(2)で挙げたブリュレの疑問もこの史料集によって呼び起こされたものである。
- (7) H. Van der Wee, *op. cit.*, II, pp.160-161.
- (8) 著者が挙げた数字 *ibid.*, I, pp.517-519. を検討してみると, 徴収総額において1530年代と1540年代の年平均額の比較で後者が7%以上落ち込んでいることが判る。しかしながら史料所載の徴収所のうち年平均額で1540年代に増加を示しているのはブラバント南部にあるルーヴァンとブリュッセルの二つなのだ。しかもこれらは併せて徴収額で全ブラバントの三分の一以上を占める上位二つの徴収所である。そこで著者は「南の」という表現で「アントウェルペンより南の」という意味に解しているとか考えようがない。地図で確認できた Uilenberg, Ouwen, Elewijt などこれに該当する徴収所は確かに減少してはいる。しかし1540年代で総額の四分の一以上を占め, これらより南に位置するルーヴァンの徴収額が1530年代と比較して24%以上の伸びを示しているという事実は著者の立論を掘り崩すものでしかない。地図は次のもので検索した。 *Les dénombremens de foyer en Brabant (XIV<sup>e</sup>-XVI<sup>e</sup> siècle)* par J. Cuvelier éd., Bruxelles 1912. 所載の Carte du duché de Brabant en 1437.
- (9) Brulez, *Antwerpens bloeitijd*, blz. 159. ちなみにブリュレはアントウェ



ルベン市場の取引の大宗を、第一にイタリアの絹、第二にイギリス毛織物、第三にバルト海穀物と考えている。Brulez, Tegenstelling, blz, 25.

## 小 括

本書には論拠の薄弱な立論も存在した。特に16世紀中葉における同市場と南ドイツ経済の関連は今後の検討に俟たねばならない点が多い。しかしこれも本書の意義を減じることにはならないと私は考える。

ファン・デル・ウェーの著書の第一の意義は、アントウェルペンの繁栄の全体像を呈示した点にこそ求められる。様々な研究が著わされてきた今日、個々の成果はともすれば錯雑し相反した繁栄像を提供し、依って立つべき全体の姿が見失なわれがちであったからである。著者は、繁栄の支柱如何というテーマに指針を与え、今後の研究に手懸りを示してくれたといえよう。

本書は、1960年代前半に相い次いで刊行された研究書・史料集の中でその最も貴重な寄与であったといわねばなるまい。

(筆者の住所：国立市東2-24-36 中村進方)